

挑む!

「でんしゃのニガオエ屋」代表

山下 順さん(35)

運転士の夢 ワクワク描く

電車の顔をした枠の中に似顔絵を描く催しを各地で開く。山下さんが描く枠は新幹線から路面電車まで260種類。開催地ごとに地元の似顔絵師と組み、運転士や車掌などお客が希望する姿を描いてもらう。料金は1人2千円



京都造形芸術大の環境デザイン学科卒業。街の標識や庭園など景観について学ぶ。在学中の2002年に「でんしゃのニガオエ屋」を始める。

と興奮した。小学校に進むころ、両親が離婚し、父と埼玉県へ。家族で乗った南海の電車が恋しく、家の中に難波駅の模型をつくり、列車を走らせた。中学2年のとき、南海貴志川線（今の和歌山電鉄）の木造車両が廃車になると知り、車庫がある和歌山市の伊太祈曾駅へ見に行った。「乗客や風景は変わるのに、電車は変わらず走ってきたんやな」。関西に帰りたいたい思いながら、関西の電車の絵を描き続けた。高校を卒業し、京都の芸術大へ。東京のイベントに電車の顔を描いたはがきを出展したことを機に、3年生から今の活動を始めた。現在、趣味として続け、本業は鉄道に関わる仕事だ。「電車はただの輸送手段やない。人の日常や思い出を運んでる」。いつか廃車で鉄道の魅力を味わえるカフェを開きたい。

文・写真 花房真子

記者から

鉄道の質問をするたび、本や模型を引っ張り出し、話が止まらない。鉄道愛、伝わりました。